



神杉 旨宣 (城西大学附属城西中学校・高等学校校長)

第二代校長の野口援太郎は大正自由教育の精神を最も純粋に追求した学校といわれる「池袋児童の村小学校」を創設した人物である。野口は『子どもには、先生と場所と時間を選ぶ自由がある。万事自由がよい。世の中には、自由の行き過ぎを心配する人もおるが、そういう人間は自由が嫌いなんだ。自由は行き過ぎがよい』との考えで、時間割はなし、チャイムもなし、決まっているのは始業九時と終業三時のみ。子どもの中には、一日中、本を読む子もいた。絵ばかり描く子もいた。お庭の椎の木に登って遊んでいる子もいた。文芸でも芸術でも最高のものを与えている。優れた絵画を鑑賞したり、音楽会にも出かけた。「十五夜お月さん」を作詞した詩人の野口雨情は、ときどき児童の村小学校にきて、子どもたちに話をしたという。「夏の学校」は野尻湖、九十九里、軽井沢、房総などに二週間滞在し、自然に親しみ、共同で食事を作り、自由研究の発表会や演芸会もあり、充実した共同生活を送った。

その後、野口は城西中学校を引き継ぎ小中一貫教育が展開された。城西学園と名称を改め、めざしたのは、明治初期以来の官制の画一的な教育ではなく、子どもが持つ『自発性を尊重し、自尊心を築く教育』の実現にあった。具体的には、学座教育・作業教育・実科教育・自治教育が実践された。学座教育では、生徒は毎日自分の時間割を決め、科目別の教室に向き、学年の枠を取り払って自由に勉強をする。作業教育では科学実験で使用する物理器具、科学的製品の制作、木工や図画、園芸作業もあった。

池袋児童の村小学校で行われていた教育、および開校当時の城西学園が行っていた教育は、教科横断型であり、体験重視であり、自発活動を重視した教育である。まさに、現在多くの学校が取り組んでいる「探究」そのものである。100年以上前から、城西学園にはこうした教育の実践があった。そして令和の現在、本校では、サマースクール(中1)や、京都研修(中2)、芸術鑑賞会(全校)、音楽祭(全校)、オーストラリア研修(中3)、国内・海外探究型修学旅行(高2)などに姿を変えて実践されている。特に高校生に展開される探究プログラム「BEYOND」・「αゼミ」がその最たるものと言える。

以下は、昨年の全高校1年生が計20時間をかけ、取り組んだ探究プログラム『BEYOND』のテーマ一覧である。

#1 地球と人間の間を探究する ～ホモサピ探究



「ヒトは地球上でどんな存在か？」 #2 社会に貢献する ～国連で活躍するプロフェッショナルと一緒に「社会貢献行動計画」を作ろう！ #3 取材して発信してみる ～情報化社会で、メディアを探究し、自分なりのコンテンツを作成せよ！ #4 SDGs を世界で実践する ～地球規模の課題に英語で挑戦する！ #5 平和を創る ～「平和」をいっしょに考え、一人ひとりにとっての平和構築への入り口を探る #6 ビジネスを創る～新しいビジネスを生み出す楽しさを体験しよう！ #7 未来を創る ～「未来妄想型プロジェクト」ディズニーランドや万博作りに関わってきたスペシャル講師と学ぶ #8 科学と社会をつなげる ～社会の中にある「科学」を探してみんなに伝えてみよう！ #9 健康と命を守る ～いのちってなんだろう？国際協力の事例をもとに探究する #10 常識を疑う ～恋愛・教育・お金・戦争、社会の"当たり前"を紐解く #11 海外へ飛び出す～自分の留学計画を作ってみよう #12 教育を探究する～私たちは、なぜ学校に行くのだろうか

これらのテーマに取り組んだ結果、以下のような声があがった。

「不を理想の形にすることがビジネスチャンスだということを聞き、納得ができ、最も心が動いた。」「普段の授業などでは、ここまで全員を巻き込んだディベートをする機会はなかったので、このようなプログラムに参加している人全員でディベートができたことが一番心動きました。」「取材をしたときに〇〇さんが、『自分の好奇心・アンテナを信じて自分の心に正直になることが大切だ。』と言っていたのが印象的だった。」「常識の定義や当たり前とは何か答えがなかなか見つからないことについての考える力を伸ばしていきたいです。」「自然動物保護区に観光客を入れることをやめるのいいが、すると収益がなくなり密猟者を監視するレンジャーを雇用できなくなり最終的に動物が絶滅する。」「量子力学やその

他のまだ知らない化学や物理などを、まだ習っていないという理由で諦めたりせずに、意欲的に学んでいきたい。」

これとは別に、高校生を対象に参加希望者が増え続けているのが、『 α ゼミ』と呼ばれる超実践型のキャリア探究プログラムである。今年度は、「まちゼミ」という名称で、自分たちで学校の所在地である豊島区の椎名町・要町をより良く・楽しくするための研究成果を企業や地域住民の方々へ提案する場の設定にむけ、最終段階に入っている。1 ユニット 7 人全 6 チーム（計 42 人）が、それぞれのテーマを設定し活動をしている。

（A）椎名町らしい、まちの人のための駅前施設とは何だろう？（B）トキワ荘通りを人が歩きたくなるにはどんな拠点があればいいだろう？（C）学校の食堂をまちの人に広く利用してもらうにはどうしたらいいだろう？（D）学生・卒業生のために学生生活が楽しくなるような提案をしよう！（E）子供たちのサードプレイス（F）椎名町・要町周辺地域の将来。

まずは自分たちで課題を見つけ、解決する。次に、誰かの立場（高齢者、高校生、学校、商店街等）の「困りごと」を解決する。 α ゼミの「まちゼミ」が生徒たちに一体どのような形で、どのような化学反応をみせるのか、3月の地域住民へのプレゼンの日を待ちたい。

コロナの影響で、海外への修学旅行が国内へと変更された年に、岡山県へ訪れた α ゼミの数グループが、高齢化と過疎化の進む集落の地域創生に自分たちのできることを提案した。

グループごとに地元のお年寄りや役場の方々の前で、企画内容をプレゼンしたが、その一つのグループが、観光客の集客の一助になればと入浴剤の開発を提案した。その後、約1年をかけオンラインで現地の方々と会議を続け、商品化へたどり着き、当時NHKでも大きく取り上げられた。当時、高2だった女子5人組の提案であったが、この経験が高3になった彼女たちの大学選択に大きな影響をもたらした。

Aさん『備中吹屋という地域を盛り上げる為に商品開発を行なったことをきっかけに…吹屋地域の方々と関わっていく中で、自分自身が気づかなかった地域の魅力を知ることができましたし、地域活性化の為に尽力するやりがいを感じることができました。（中略）大学では「メディアを活用した地域ブランド戦略について」という研究テーマをも軸に、学びを深めていくつもりです…現地の方々の声を聴き、それぞれの地域が持つ課題や特色を知る必要があります。』

Bさん『私は将来、地方公務員になり、地方創生に貢献したいです…きっかけは、高校2年次にゼミ

活動の一環として吹屋という過疎化が進んでいる地域を盛り上げるために商品開発を行なったことです…現地の方の声に応えることにやりがいを感じました…事実で改めて気づくことができました。その為、私は地方公務員になり、地方創生に携わりたいと考えようになりました。』

二人は総合型入試などで、自らの経験を生かして見事に難関大学の合格をつかむこととなった。この二人の志願理由書を読み、あらめて、探究は、『心のエンジンに火をつける』最高のプログラムであり、その生徒が『行動』を伴ったときに、はじめて意味を持つものだと痛感した。教師はあくまでもファシリテーターに徹する。義務的・押し付け的な探究など何の意味もないのは周知の事実だ。

約100年前、野口の掲げた『自発性を尊重し、自尊心を築く教育』は、現在『自己肯定感の定着』を目指す城西の『Josai Future Global Leader Program』として展開されている。解のない問いに対する挑戦。その数をこなしていくのは、なにも生徒ばかりではないはずだ。我々教師も探究者でありたいと強く願っている。その想いで教育に携わってこそ、探究への熱が生徒たちに伝播していくのであらうと考える。

そして感性も柔らかかで多感なこの時期が、人間の成長過程において重要な時期であるとともに、彼等、彼女等が「今」長い人生の道程の先頭を一生懸命に歩いているということ、これを肝に銘じて多くの成功と失敗を見守っていききたい。

（当時、児童の村小学校で平田のぶ先生が病気になり退職を余儀なくされたときに、一番心にかけていた児童の母親にあてたお別れの手紙の一節より）『おかあさま、わたしは子どもを、大人になるための準備期間だとは思いません。川は流れ流れて海にそそぎます。でも川は、海になるためのものではありません。川には川の生き方がございます。山あいの泉の時代、谷川のせせらぎの時代、野をゆったりと流れる時代…そこには、それぞれにたのしく、きびしい生活がございます。おなじように、子どもにも子どもだけの生活がございます。川をはやく海にしようと、流れをまっすぐになおしたら、どんなにおそろしいことがおきるでしょう。』



HP QR コード